

# 東京医療保健大学大学院

## 感染制御実践看護学講座(6ヶ月研修)

平成 22 年 8 月に開講した東京医療保健大学大学院 感染制御実践看護学講座(6ヶ月研修)の学びについて受講生の声を紹介します。

### 「感染制御実践看護学講座(6ヶ月研修)を受講して」

小林 マキ子 【特定医療法人三栄会 ツカザキ病院勤務(兵庫県姫路市)】



私が、東京医療保健大学大学院「感染制御看護学講座(6ヶ月研修)」を受講するきっかけとなったのは、感染対策担当者を命じられたものの、医療関係団体等が主催する感染管理に係る研修を受講するためには、現職を 6 ヶ月間休業して研修を受けなければならないことに悩んでいたところ、働きながら受けられる研修があると聞いたことです。どうにかしてこの研修に参加したいと思い申し込みました。合格通知が送られてきた時、嬉しさの反面、毎週兵庫から東京に通うことに対し不安になりました。しかし、実際に始まると新幹線に乗っている間の 3 時間はどこよりも勉強に集中できる時間だったので苦ではありませんでした。

感染制御実践看護学講座(6ヶ月研修)に参加して、本当に良かったと思うことは、有名な先生方の講義が受けられいろんな情報が頂けたこと、各地から集まった研修生同士での情報交換ができたことです。普段は仕事をして、週末には東京へ行く生活は決して楽ではありませんでしたが、講師の先生方や研修生の皆に会えると思うと苦には感じませんでした。

また、自施設実習では、小林寛伊先生に直接指導して頂き病院全体が感染対策の重要性を認識できたと思います。自施設で実習する中で、分からない事があれば小林寛伊先生や大久保憲先生、その他の講師の先生方に直接メールで質問し、指導して頂くこともありました。講座が終了し、専従の感染制御担当者として働くにあたり不安もありますが、今まで学んだ事をもとに頑張っって感染防止に努めたいと思います。

篠崎 知津 【財団法人永頼会 松山市民病院勤務(愛媛県松山市)】



私が、東京医療保健大学大学院「感染制御看護学講座(6ヶ月研修)」を受講する以前、当院に感染制御学を専門に学び修了している看護師がいませんでした。各自が自己学習による、感染対策・感染症報告・ICT(Infection Control Team)ラウンドなどを手探りで実施している状況でした。年々活発に活動を行いつつありましたが、現場では専門性をもった看護師が求められていました。

そんな時に会ったのが、現職業務を継続しながらの受講が可能な東京医療保健大学大学院の感染制御実践看護学講座(6ヶ月研修)でした。

始めは、愛媛から東京へ毎月数回に及ぶ受講は不安もありました。しかし、勤務体制を調整し、学習環境を整えて頂くなど、病院の配慮、協力を得て続けることができました。

本講座では多くの有名な先生方が熱心に講座を開いて下さいました。ICN(Infection Control Nurse)が活躍している病院での実習は、感染対策の実際を学ぶ事ができとても充実した実習でした。

また自施設実習では学び得た内容について、自施設での現状や問題について検討し、疑問点は、すぐに先生方へ相談でき、現場で活かすことができましたと思います。そして、遠い愛媛の土地まで小林寛伊先生にも訪問して頂き、実際に当院での問題点について指導頂くこともできました。病院全体での感染対策を変える大きなきっかけとなったと思います。

何より全国からいろいろな立場の研修生が集まり協力しながら授業を受けることで、全国に仲間ができたことは私の大きな財産となりました。今後も大切な存在になると思います。

この度一期生として、感染制御実践看護学講座(6ヶ月研修)の教育を終え、まだまだ始まったばかりですが、当院での感染対策の見直しと充実を行い、病院の質の向上のために努力していこうと考えています。

## 森山由紀【医療法人五星会 菊名記念病院勤務(神奈川県横浜市)】



「感染制御実践看護学講座(6ヶ月研修)」という名称の通り、感染制御活動を実践するための知識や方法を学ぶ事ができる講座です。感染制御とは何か、現在に至るまでの感染制御の歴史という基本から学習が始まり、徐々に各論に進んでいきます。感染制御の一线で活躍されている講師の方々から講義を受けることができる、非常に恵まれた環境でもあります。

講座の中には小論文の課題があります。小論文と聞くと気が重くなるのですが、講義内容と、実際の業務とを照らし合わせて考える事ができる課題です。考える事・具体策を導く道筋を自分の中に作る事ができる良い課題と考え、取り組んでいます。

また講義を聞くだけでなく他施設に実習にも行きます。感染に携わる実務をしながらですので、「自施設での課題を解決するためにはどうすればよいか」を考えながら、臨むことができます。指導者はその施設で感染制御活動を実際に行っている方ですので、実習施設での実際の取り組みや、現在に至るまでの工夫なども知ることができます。さらに学びを共有するための報告会もあり、プレゼンの仕方なども学びます。その他、動画を見ての学習やパームスタンプを用いた細菌の実験なども行いました。

このような学習によって得るものは多く、貴重な体験で、自施設で指導・教育するために生かせるものがたくさんあります。

最後に、受講して最も良かったと感じていることは、同じ問題に取り組む仲間ができた事です。毎週各地から集まり、課題・悩みなどを話していくうちに、この場所がとても大切な場所となりました。感染制御活動は様々な方の協力・理解を得てなされます。感染制御という大きな目標に向かうには、一人では難しい事も多く、横のつながりが大切だということも学びました。単に知識を得る場所ではなく、人と人との関係も学ぶ出来ることができる本当に学びの多い講座です。



平成 22 年 3 月に基本診療の施設基準等の一部改正が行われ、入院時の感染防止対策加算(100 点)が算定できることとなり、算定要件としての看護師の条件の一つは、感染管理に係る適切な 6 ヶ月以上の研修を修了していることであった。これが認定看護師ではない私が、東京医療保健大学大学院「感染制御看護学講座(6 ヶ月研修)」を受講することになった背景である。

講座開始早々、感染制御の世界では著名な先生が次々と登場し、目の前で豊富な知識と最新情報、世界の感染制御についての講義をして頂いた。先生は受講生の質問に丁寧に答え、「いつでも質問してください」と、e-mail アドレスを教えて下さり、先生方が身近な存在であることを体感した。

また、印象に残る授業の一つにコンサルテーションに関する講義があった。講義とグループワークを通して感染制御におけるコンサルテーションとはどういうことなのか、コンサルティ、コンサルタントとして私達はどのように対応すべきなのか実体験を共有し、今までの対応を反省しながら学ぶことができた。

さらに講座の目玉として、小林寛伊先生、大久保憲先生のどちらかが行う自施設ラウンド指導があった。自施設をラウンドし、問題点などを先生方からフィードバックするという実習である。私の施設は小林寛伊先生が指導したが、医師・看護師からコメディカル・事務職まで小林寛伊先生が来るということに興奮し、まるで大名行列のように病院を移動した。現在、先生のフィードバックに基づき環境改善に取り組んでいるが、理想的な環境にする為に各部署と協力できるのは小林寛伊先生のアドバイスが非常に効果があると実感した。

働きながら学ぶ本講座の講義は、2 回の集中講義と毎週土曜日の講義で構成されている。「働きながら」というのは想像以上に努力を必要とするのも事実である。しかし、すばらしい講師陣、指導者である認定看護師の皆さんのきめ細やかな指導や、実体験に基づくアドバイスはこの講座でしか経験できないすばらしいものである。また、今回一緒に学んだ全国の仲間との交流は本講座で得られたかけがえの無い財産だと思っている。

感染制御を目指す看護師にはこの講座を経験し、一緒に日本の感染制御のレベルアップを目指していければと願うところである。